

小説集『世界神秘郷』と高橋鐵の作家活動について

櫻庭 太一

本稿の目的について

第二次大戦後、『あるす・あまとりあ』（昭和二十四年、あまとりあ社）などのベストセラーを生み、性科学研究の分野で名を馳せた作家・高橋鐵は、戦前期からさまざまな雑誌、新聞等において著作活動を行っていた。特に昭和十年代前半から半ばにかけて、彼は『オール讀物』（文藝春秋社）、『新青年』（博文館）、『日の出』（新潮社）などの大衆文芸雑誌を中心に多くの小説、コラム等を発表しており、後年の「性研究の大家」というイメージとは一風異なる多様な作品を残している。しかしながら、今日残る高橋の著作および資料の多くは、やはり戦後に彼がメインフィールドとした性科学に関係したものの、あるいは晩年における性表現をめぐる当局との裁判闘争—いわゆる「高橋性学裁判」—を取り上げたものであり、同じく高橋本人の人物像や経歴についてもそうした「反骨の性科学者」像を前提とした紹介や分析が中心となっていて、彼の戦前の活動の多様さ、活発さについて詳細に触れているものは少ない。そうした経緯から、論者は拙稿『雑誌「精神分析」における高橋鐵の活動』（専修国文九十一号）において、高橋が所属していた東京精神分析学研究所での活動、またその機関誌『精神分析』における彼の著作についてその概要をまとめ、高橋鐵の戦前におけるキャリアおよび作品の多様性について言及した。

本稿では、そうした高橋の「多様なキャリアと作品」の解明をさらにすすめるための資料として、彼が昭和十五年に上梓した最初の短編小説集『世界神秘郷』を取り上げ、そこに収録された各作品のあらすじの紹介及び解題を行

い、高橋の著作活動の経緯と、同書が彼の著作活動においてどのような意味をもっていたのかについて考察を行う。まず第一節において題材である『世界神秘郷』の概要と時代背景を説明し、第二節では収録作それぞれのあらすじの紹介と解説を行っている。その上で、第三節では『世界神秘郷』収録作にみる高橋の小説作品の特徴と、後述する「太古の血」事件の分析を通じ、高橋にとって『世界神秘郷』という作品集がいかなる位置づけにあったのかという点について分析を試みる。前稿「雑誌『精神分析』における高橋鐵」と同様、高橋鐵の人物像、また作家像再考における、材料のひとつとしたい。

1. 『世界神秘郷』概要

本稿で取り上げる『世界神秘郷』は、昭和十六年二月に霞ヶ関書房（東京市赤坂区溜池）から刊行された高橋鐵最初の小説集である。『世界神秘郷』というタイトルの通り、本作は世界各地の秘境、あるいは日本の異時代を舞台にした短編の冒険、ミステリー小説を中心に構成されている。以下、収録各作品のタイトル下に舞台となっている地域と時代、初出誌を挙げる。

- ・「孤島の瞳人」トウジン 南米チリ、イースター島／現代、『新青年』昭和十四年新年号
- ・「明笛魔曲」メイフキマク 中国西湖地方／現代、『オール讀物』昭和十三年五月号
- ・「氷人創生記」北極、北米アラスカ地方／現代、『オール讀物』昭和十三年九月号
- ・「太古の血」日本（関東地方）／五千年（前）前、『オール讀物』昭和十五年一月号
- ・「天童殺し痛恨記」テンチュウコロシ 日本／慶長（元）元和年間、『文學建設』昭和十四年二月号
- ・「野獸園秘事」フランス／西曆千七百年代後半（ルイ王朝末期）、『オール讀物』昭和十三年六月号

・「メデイア媛の觸手」フランス、パリ／現代、不明。書き下ろしか。

(本書掲載順。なお右記のうち、現代とあるのは作品の初出時期である昭和初年～十年代を指す)

各作の詳細については第二節で触れるが、掲載誌・掲載時期がそれぞれ異なり、また内容傾向も異なる点から、シリーズものとして企画的・継続的に執筆されたものではなく、それぞれ別個に書かれた小説七作を選んで一冊にまとめたものと思われる。なお、高橋の小説として最初に発表された作品は『オール讀物』昭和十二年十一月号掲載の『怪船人魚號』であるが、本書には収録されていない(翌昭和十七年刊行の短編小説集『南方夢幻境』に収録)。全体として、『オール讀物』(文藝春秋社)と『新青年』(新青年社)に掲載された大衆小説作品(例外は同人誌『文学建設』に掲載された「天童殺シ痛恨記」^{アンジエロコウ コンヒサシ})を中心として構成されている。

また本書は昭和二十八年三月に高橋の代表的著書『あるす・あまとりあ』^{※3}の版元である久保書店から再刊され、この際に作品掲載順の変更と新作『嗜眠舞』^{しみんぶ}の追加収録、また「自ら謎語をつぶやく」という表題の前書きが付加がされている。なお、この昭和二十八年版で追加された『嗜眠舞』と「自ら謎語をつぶやく」については第二節および第三節で取り上げているが、本稿では初版である昭和十六年版(以下、本書と呼称する場合は基本的にこの昭和十六年版を指す)を中心に分析を行うこととする。

刊行当時の高橋鐵の活動

本稿冒頭で述べたとおり、『世界神秘郷』が刊行された当時、高橋はすでに複数の商業誌でコラムや短編小説を発表していた。特に前掲「怪船人魚號」を昭和十二年に発表して以降の高橋の活発な小説執筆については、所属する東

京精神分析学研究所の機関誌『精神分析』誌上でも「分析的小説家としての高橋鐵氏の位置も確立して来たやうです」(昭和十三年九月号、九十八頁)・「高橋鐵氏は實驗心理學畑の人であるが、文才豊富で、目下盛んに分析學應用の小説を『オール讀物』などに発表しつゝある」(昭和十四年三月号、五頁)などと言及されており、内外での活発な活動から同研究所の「エース」として注目を集めていた様子がうかがえる。ところがそうした声とは裏腹に、高橋は本書昭和十六年版に掲載された「夢 アトガキ」内で

(櫻庭註…文壇や出版業界からの小説執筆を後押しする声に触れた上で)

それなのに、今の私は怠けてゐる。——といつて悪ければ、心理學の象牙の塔に立ち戻り生活心理學といふ新分野の體系化のみに専念し、夢も神話も忘れ果てゝゐる。(同書 三一〇頁)

と語り、小説執筆に対するモチベーションを失つた心境を述べている。上記引用文中の「生活心理學」は、高橋が『世界神秘郷』刊行と同じ昭和十六年四月に創設しその会長となつた「日本生活心理学会」の活動を指すと考えられるが、ここで語られている通り、本書刊行の昭和十六年以降、高橋は大本堂所屬の「精動本部」に戦時宣伝のスタッフとして勤務を開始するなど、小説執筆よりも長年キャリアを積んでいた広告・宣伝分野の仕事やその研究に活動の軸足を移しはじめてゐる。翌十七年には既発表の作品を集めた二冊目の作品集『南方夢幻境』(東栄社)を刊行しているが、新作の雑誌発表はない。すなわち、同時期は高橋の文筆活動と広告業界での実績が認知され、彼の名が世に出はじめた時期であると同時に、小説家としての活動からは身を引き、宣伝業界の人・高橋鐵に移行しつつあつた転換の時期にあたると言えるだろう。次節以降、収録各作品のあらすじ紹介および解説を通じて、その転換の背

景にあったものについて考察を進めていく。

2. 各話あらすじと解説

以下、本書収録の七作品および、昭和二十八年版に追加収録された「嗜眠舞」のあらすじと各作品についての解説を挙げる。それぞれタイトルに続いて前半部をあらすじ、後半部を解説とした。

● 「孤島の瞳人」

【あらすじ】聞き手の「私」が、長年太平洋航路で船医を勤めていた説田ときた繁から、彼が南海の果ての孤島・復活祭島イースターアイランドで巻き込まれたという「妙な事件」についての話を聞く場面から始まる。

十五年前、説田は南米チリのヴァルパライソで革命運動の志士・カパゴリと出会い、彼からある不思議な依頼を託される。それはカパゴリが流刑のためイースター島に滞在していた折に恋人となり、子を宿した原住民酋長の娘ヅヒネ・マニユ・タラの搜索と彼女への伝言だった。彼によれば、ヅヒネは白人との通婚を忌む掟によって島を追放されたことになっているが、老下男じいやのトメニコの機転によって助けられ、今も島内のどこかにカパゴリの子とともに隠れ棲んでいるはずだと言う。その話に興味を抱いた説田はイースター島へと渡り搜索を開始する。そしてふとしたきっかけからトメニコ老人と出会い、さらに島に立ち並ぶ巨像モアイの一つに隠し部屋を作ってそこで生活していたヅヒネと邂逅することができた。早速カパゴリからの伝言を伝え、恋人の無事を知って喜ぶヅヒネとトメニコ老人の歓待を受ける。ところが、翌朝隠れ家を出ようとした説田は突如原住民の襲撃を受ける。それはトメニコらによって娘の生存を知らされ、ほとぼりが冷めるまでその秘密を護っておこうとしたヅヒネの父が説田を敵と誤解して起こしたものだ

た。なんとか誤解を解いた説田は、さらにヱヒネとカバゴリの子の追放問題を解決する策を授け、ヱヒネの父、そしてカバゴリからも大いに感謝されることになったのだった。「も一度あの復活祭島へだけは行つてみたいと思ふ」と当時を述懐し、ごろりと横になる説田。「私」は、今は奇矯な老医学者として不遇に暮らす彼の横顔を見て、「妙に傳奇的なこの話も、或ひは夢多い彼の瞳の中に人が夢に見た語ことばかも知れない」と思いながら寂しく微笑むのだった。

本作は「私」が説田老人の体験談、さらに彼からカバゴリの体験談を聞くかたちで展開する。物語はカバゴリと原住民の娘ヱヒネとが恋愛関係に陥る前半部と、彼の依頼によって説田がヱヒネ捜索に向かう後半部とに大別できるが、全体として、島外の文明圏からやってきたよそ者である主人公（本作においてはカバゴリと説田という二人の人物に役割が分担されている）が、原住民の美しい娘と恋愛関係となり、その関係を破壊しようとする圧力を打破する、さらに原住民の側にも本来の秩序が回復される、という構造となっている。このように本作では「文明人」である主人公側が、未開人を救出し、啓蒙する」という視点にもとづいて物語が展開され、当時の「冒険物」小説にも広く見られるヒロイズムとエキゾチズムの混在、そして「世界で活躍し慕われる日本人（≠文明化された「非白人」）」を肯定的に描き出すものになっている。この点で言えば、本作が掲載された『新青年』昭和十四年一月号をはじめ、同時代の娯楽誌に頻繁に見られる「冒険征服もの」「秘境探検もの」の形式を色濃く引きずっており、その点において後掲の「明笛魔曲」、「氷人創生期」と同様の悲恋譚としてのフォーマットにのっとってはいるものの、高橋の独自色が濃い作品とは言い難い。

しかしながら、最後に物語全体が説田老人の「夢に見た語」を語ったもの、すなわちフィクションであるかも知れないという解釈を「私」にほのめかさせることで、単純な冒険譚や武勇伝語りとは異なる独特の余韻、言うならば

「そうした武勇伝」を語る不遇な老人の心理」へと読者の目を向けさせる特色を出していると言えるだろう。

● 「明笛魔曲」

【あらすじ】 中国・西湖に写生旅行にやってきた「私」は、ある夜、湖畔を散策中に道端の屋敷の墻の上から突然逃れ出て来た中国人の少女・呉青華を助ける。彼女はどうかやら催眠術のようなものをかけられているらしく、どこからともなく聞こえてくる不思議な笛の音にひどくおびえていたが、やがて正気を取り戻す。しかし自身の素性や背景については「悪漢に捕らわれていた」と答えるだけで多くを語りたがらなかった。「私」は友人である長澤と共に彼女をかくまうこととし、交流を深めていく。ところがある夜、ふたたびあの笛の音を聴いた彼女は催眠状態に陥り、フラフラと外へさ迷い出す。驚きながらも謎を解明しようとその後を追った「私」と長澤は、青華が現地マフィアの青幫によって特定の笛の音を聴くと催眠状態に陥る「覚醒夢遊症」^{ウイギザムミリスミス}とされ、同性愛者の女富豪・黄賓蓮のなぐさみものとなつていてることを突き止める。恐ろしさにおびえる青華を護るため、「私」は共に日本に帰国すると決めるが、西湖を立つ当日、青華は彼女の弟を利用した青幫の計略によって拉致されてしまう。「私」と長澤は彼女を救い出すために黄賓蓮のもとへ乗り込むが、すでに青幫の手により見世物として連れ去られた後であった。しかし青華が弟に託した手紙を受け取った「私」と長澤は、青幫と同じマフィアの紅幫との対立を利用することで上手く青華を取り戻すことに成功する。「私」は、日本に行き一緒に暮らそうと青華に告白するが、彼女は「いつも備」^{あだ}のことを想つてゐます」と語りながらも、涙ながらに「私」の告白を謝絶し、中国の地に残ると言う。

そして独り日本に戻ってから十二年あまりの後、「私」は音信途絶えていた青華の姿を映画館のニュース映像の中に発見する。子どもをもうけ、幸せそうな表情でいる青華の映像を見ながら、「私」はあのとときの出来事、そして聞

こえてきた笛の音をまざまざと思い出すのだった。

本作は「私」による一人称の語りによつて、中国西湖畔における美しい少女・呉青華との出会いと、それを発端として起きた奇怪な事件とを描いている。主人公「私」は青華との交流や彼女への想いといった恋愛パートの主人公としての役割、言動が中心であり、作中における謎解き、真相解明に関係する行動や意見については、主に友人である長澤が担当する構成となっている。これは前掲「孤島の瞳人」において、前半部分の主人公であるカバゴリが「ヒロインとの出会いと恋愛」を、後半部分の説田が「ヒロインの救出と謎の解明」をそれぞれ物語上で担当する役割をになつていたので通じる構成であると言えよう。

また「現地の美しい娘ヒロインと恋に落ち」、「その関係を破壊しようとする圧力（本作においては中国マフィアの青幫）を打破し、ヒロインを救出する」という物語の基本線部分も同作と同じパターンだが、最後に青華が「主人公との恋愛成就ではなく、現地に残る」という選択をすることで悲恋譚としての要素を含ませている。しかし物語終盤でヒロインを日本軍の中国進出を歓迎する中国民衆の中で「日の丸の旗を振つてゐる」姿、すなわち「私（＝日本）」との繋がりを感じさせる形で再登場させてもいる。こうした「混乱し犯罪の横行する中国大陸で日本人が活躍する（さらに現地での歓迎を受ける）」という展開づけは、当時中国大陸への進出に沸く日本、そして大衆雑誌の読者の興味関心に合わせた展開として解釈できる。同様の構図は前掲の「孤島の瞳人」はじめ本書収録作の各作において見られる要素だが、本作においてはその舞台設定も含めて最も時事的なもの（※）となつてのが特徴である。また本作においては「覚醒夢遊症カイゼンメリスエ」という催眠術をかけられたヒロインの異常行動が物語の発端となつており、高橋は『精神分析』昭和十四年九月号に掲載したエッセイ「精神病者を描いた文學」で本作を夢遊病者を描いた作品として挙げているが、そ

の詳細なトリックや彼女がその術にかけられていった過程等の詳細部分についての描写や医学的裏付けなどについては殆ど触れられず、その掘り下げも行われていないため、高橋本人が言うような「精神病の症候を小説に応用した作品」としての要素は低い作品であると言えよう。

● 「氷人創生記」

【あらすじ】北極探検にやってきた医学博士・北本宣司とドイツ人探検家のクルト・ミュラー。二人は巨大氷山の調査中、偶然凍り漬けになった女を発見する。驚愕する北本たちだったが、突然起きた氷山の崩壊によって乗ってきた船と引き離され、氷漬けの女とともに北海のただ中に漂流することとなってしまった。二人はなんとかして脱出しようとする手尽くすとともに、その女の調査を始める。そして「女を蘇生させることができる」と直感した北本は、様々な処置の末、とうとう女をよみがえらせることに成功した。事情を聞くうち、女の名はアニギートと言い、今から四十年ほど前、西へ旅をする途中に氷漬けとなった人物であることが分かる。彼女の助けも得ながら救出への道を探るうちに北本たちは漂流からの脱出に成功。沿岸のエスキモーたちに助けられ、しばし安住の地を得た。ところが、アニギートと共に旅を続けるうち、ミュラーは彼女の身体にある不思議な入れ墨が、彼女が目指す西の方角にある金鉱の位置を示したのではないかと推測し、それを手に入れようという野心を露わにし始める。やがて金鉱への欲望とアニギートの美しさに心を囚われたミュラーは、北本を排除して彼女を強引に自分のものにしようとしますが、アニギートの抵抗によって命を落とす。そして二人きりで旅を続ける北本とアニギートは、次第に想いを通じ合うようになっていった。やがてアニギートの身体に記された地図通りの場所に、莫大な富を産む瀝青ウラン（ラジウム）の鉱脈を発見した北本は、一緒に日本に帰ろうと彼女に言うが、彼女はこの地を離れることを拒否し、氷原の中に姿を消

す。失意のまま日本に帰った北本は「凍死体を蘇生させる方法」についての学会報告を行うが認められることなく、精神を病んだと見なされた彼は、病室でひとり「氷河の国へ帰りたい」と叫び続けるのだった。

本作は日本人の主人公・北本が水中に仮死状態のまま閉じ込められていた現地人の娘アニギートを蘇生させたことを発端として、彼女の身体に印された入れ墨とそれが指し示す「秘宝」のありかをめぐる冒険譚、またアニギート自身との恋愛譚としての要素が交互に展開されている。戦後、本作が再録された『幻影城』創刊号で、浅井健は「百二十枚の長さを感じさせない緊迫感があり、理知的なイギリス人と野性的なエスキモーの混血娘アニギートに託して語られる氏の耽美願望は、この作品がもつとも成功していると思われる。」(同十九頁)と高く評価している。浅井が指摘するように、本作は北極圏の自然やヒロインであるアニギートの美しさと苛烈さが非常に耽美的、かつ丹念に描かれ、そこに秘宝の争奪だけでなく、アニギートをめぐって主人公とミュラーとの「三角関係」が絡み合わされるなど、他収録作とは一線を画した複層的な物語構造、また登場人物のキャラクター性を作り上げている。同時に、本作では北本がアニギートに対する欲望をむきだしにする欧米人ミュラーを斥けて相思相愛となるくんだりや、終盤でラジウムの大鉱脈を発見するという世界的な功績を挙げる点など、「世界で活躍する良識的・理知的な日本人」像の演出が他の作品よりもさらに明確なものとなっており、前掲の「明的魔曲」とはまた異なる点で、読者の受けを狙った(掲載誌の読者層に合わせた)作品であるとも解釈できよう。また本作では、北本がアニギートを蘇生させる手法として登場する「フオーグト・グートマン氏蘇生法」等の術学的な「用語」が多用されている点、また前述したように、高橋作品の傾向の一つである「悲恋」的要素がこの作品にもまた埋め込まれている点である。特に本作の最後はアニギートを失った上、自らの医学的功績(前掲の蘇生法によって仮死状態にあった人間を生き返らせたこと)も認

められずに精神病院で「狂人」として暮らす北本の独白で終わる悲劇的なものだが、この展開は本節冒頭で紹介した「孤島の瞳人」において、イースター島で現地人の娘を救う活躍を見せながら、今はしがたない船医として暮らす老人・説田の境遇と通じるものがあるのではないか。すなわち「異郷においてその知性と文明性とでめざましい活躍をした日本人が、現地人（特に女性）と強い結びつきを得ながら、最後はその関係が破綻し、主人公も社会的に落^{ドロップアウト}伍してしまふ」という物語構造において「孤島の瞳人」と本作はいわば「同工異曲」の作品であると言えよう。^(※9)

また、高橋本人は東京精神分析学研究所の機関誌『精神分析』上で発表した『精神病者を描いた文學』（昭和十四年九月号）で、本作を「精神病者を描いた小説」のひとつとして紹介し、精神分析学の理論を演繹して創作したものである旨を述べているが、作中では凍てついた湖に転落し意識を失った北本が、アニギートの看病を受けながら以下のような幻覚を見る場面がある。

故國の——日本の女が、眞白な乳房を出して、授乳してゐる。さう思つてゐたら、それは母であつた。抱かれて温かな胸に小さく顔を埋めてゐるのは幼い頃の自分であつた。眞白な、大きい大きい胸の肌……いや、北極圏の雪原を夢みてゐるらしい。

（一一二頁）

高橋は大雪原を母、あるいは母性的要素の表象とする分析視点を「精神分析」十年五・六月号に掲載した「雪山に誘はれむ願望——スキーイング心理分析のノート」で明らかにしており、ヒロインであるアニギートが美しくも苛烈な、そして上記文中にあるように時に母親的女性として描写されている点は、こうした高橋の「精神分析学」的視点によるキャラクター造形であろう。高橋の他の作品における「精神分析的要素」は、多くの場合用語が登場す

る、あるいは登場人物が精神分析に関する知識を開陳するといった学術的な部分に留まっているが、本作ではそれが舞台設定やヒロイン造形にも活かされており、いわば高橋の知識を博く盛り込んだ、集大成的作品として位置づけられるように思われる。

● 「太古の血」

【あらすじ】とある道路工事現場から、数千年前の住居跡が発見される。その遺跡のそばからは、まるで絡み合うように横たわる三体の白骨が掘り出された。人類学の権威・島根博士は、それが「原アイヌ人の女と原日本人の男とが、鉄剣に貫かれて死んでいる。その上に原アイヌ人の男が石鏃で胸をさされたまま倒れ伏している」状態であると断定する。この奇妙な人骨には、いかなる物語があるのか？ 島根博士は太古の昔に想いを馳せる。

およそ五千年の昔、この地にはアイヌ人達が住んでいた。彼らは自分たちの集落を「ム・チャシ（平和な城）」と名付け、狩猟や山海での食料採取を主とし、自然の神々に生贄を捧げ繁栄を祈る生活を送っていた。

ある春の夜、その年の生贄に選ばれてしまった少女オリカは、突如現れた男・ニギヒコにすんでのところで助けられる。西の国からやってきたニギヒコは、生贄は愚かしい習慣に過ぎないと断じ、鉄器の使用や農耕の知恵をム・チャシにもたたらす。そして交易をして西方の進んだ文化を取り入れ、より豊かな国を作るべきだと主張するのだった。

ム・チャシの住人はそんな彼を支持するオリカや知恵者のノイポ達と、敵視する巫女のピリポらの二派に別れてしまう。さらに敵意の裏でニギヒコに強い想いを寄せるピリポは、美女・パイカラとニギヒコの仲に嫉妬し、彼を殺そうと図る。身の危険を悟ったニギヒコは、もうすぐ西の軍勢（大和民族）がこの集落に攻め寄せてくるとム・チャシの人々に警告するが、ピリポ達は耳を貸そうとしない。やがて追い詰められたニギヒコとパイカラは自らノイポロ

のふるった剣に切られ、ノイポロもまた二人の後を追う。その時、山の向こうから関の声と鉄の武器の響き、強大な軍勢の攻め寄せてくる馬蹄の音が轟々と鳴り響いてくるのだった。

本作は『オール讀物』昭和十五年一月号初出で、『世界神秘郷』昭和十六年版の収録作品中、書き下ろし作と思われる『メデアア媛の觸手』を除けば最後期に書かれた作品であると同時に、戦前に高橋が商業誌に発表した最後の小説となった。^(※10) 第三節でも述べるとおり、本作は戦前の高橋が小説家としての道を断念する原因となった『筆禍事件』の対象でもある。その経緯について、高橋は昭和二十八年版の前書きで以下のように触れている。

爾後、本書におさめた「太古の血」（いわゆる紀元二千六百年新春発表）が、当時の文学賞をくれるとやらの噂なかばにして、突然、憲兵隊や文部省の咎めるところになり、私は囹圄の身になるかわりに、憤然として、戯作の筆を折ってしまった。

このエピソードは、高橋自身がその著書において繰り返し言及し、また彼を取り上げた書籍や雑誌の中でも戦後の「反骨の性科学者」像を補強する逸話として頻繁に登場している。高橋は本作が「憲兵隊や文部省の咎めるところ」となった理由を、後に「大和民族がアイヌ民族を侵略する」という物語展開にあったと語っているが、本作全体を改めて見渡したとき、意外にも上記の「大和民族が悪役でアイヌ民族を侵略する」といった要素は物語の構造上、最終的な破局―アイヌ集落の滅亡が仄めかされる結末―以外ではそれほど大きな役割を果たしていないことがわかる。本作は主人公とヒロインの関係性、また敵役であるピリポラ各キャラクターそれぞれが丹念に描かれ、現代に出土した

古代の骨骨をめぐる謎解き、そして悲恋譚として成功をみせている。しかしながら構造自体は他の収録作と同様「文明人」としての主人公が、異郷でめざましい活躍を見せ、現地の人々（特に女性）と深い結びつきを得ながらも最終的には破局を迎える」パターンの亜流であり、作中の「先史時代の日本」「アイヌ民族」といった要素もエキゾチズムを誘う舞台立てにこそなっているが、それらが持つ歴史的、あるいは民族的な問題を十二分に掘り下げるものとはなっておらず、またその意図があつて書かれたものとは言い難いように思われる。仮に「アイヌ民族」を「ネイティブ・アメリカン」に、「大和民族」を「白人」に置き換えても本作は十分に成立しうるであろう。そうした点から、本作はそもそも高橋が後に語るほど前掲のような民族問題、あるいは歴史意識に焦点をあてた作品ではなかつたのではないか、という指摘もできるように思われる。論者としては本作は「孤島の瞳人」や「氷人創生記」と同じく、高橋の「娯楽作品」のパターンを踏襲した作品であり、そのヴァリアントの一つとして位置づけることは出来ても、特出すべき構造の違いをもっているとは言い難く、代表作の一つとして、また前掲したような「高橋の反骨精神を体現する作品」として見るのが妥当であるかどうかは、判断の分かれるところであると考ええる。これらについての詳細および考察については第三節で改めて取り上げることとする。

●「天童殺し痛恨記」
アジエロ コンヒサン

【あらすじ】時は慶長〜元和の頃。切支丹であつた寿鶴は、仲間を助けようとしたことから役人に捕らわれ、酷い拷問を受けていたところを奉行所の医師・赤星鏑斎に助けられる。実は鏑斎もレオという洗礼名を持つ切支丹であつた。レオの元にかくまわれるうち、彼の誠実な人柄と篤い信仰心に心惹かれていく寿鶴。そんな折、同じく切支丹であつた寿鶴の弟が迫害を受けて殉教したとの知らせが届く。その遺品を届けに来た武士・右近（洗礼名ヤコボ）も二人

に合流して暮らすようになるが、とうとうレオが奉行所に捕らえられてしまう。しばらくして彼は釈放されるが、酷い拷問によって顔にむごたらしい傷を負っていた。それにも関わらずますます信仰を深めるレオの姿を見るうち、寿鶴は恋愛感情を抱くようになるがレオはそれを振り切るように傷痕を薬品で焼き、忽然と姿を消す。ヤコボによれば、レオは同志と共に稲佐岳に潜伏し、信仰を深めているということだった。悲しむ寿鶴をヤコボは慰めるが、そこには彼女への想いがあった。彼の熱烈な告白に寿鶴の心は大きく揺れる。しかし、ある日役人に踏み込まれ、ヤコボは思わずレオの潜伏先を口にしてしまう。狼狽した寿鶴は、手にした懐中の鉄砲でヤコボと役人を撃つ。ヤコボは「転んだ」ことを謝罪し、寿鶴に介錯してくれるように頼んだ。そして、ヤコボの首を藁に來るんでレオの元に駆けつけた寿鶴は、血に浸されたその藁から、緑の稲穂が伸び生えるという奇跡を目撃する。

本作は『世界神秘郷』収録作の中で唯一商業誌掲載ではなく、海音寺潮五郎らによって昭和十四年一月に創刊された文芸同人誌『文学建設』の同年二月号に掲載された。初出時のタイトル表記は「天童殺シ・痛恨記」となっている。

本作は隠れ切支丹である「お壽鶴」の一人語りによって進行していく物語であるが、まず主人公が女性であること、また冒険・ミステリー小説的展開を持たず、あくまでお壽鶴の信仰と恋愛の相克、そして破滅の果てに起きた奇跡を彼女自身の視点から描き掘り下げる内容となっている点など、冒険娯楽小説のパターンに類するところの多い他収録作との違いが明確な作品となっている。言い換えれば本書収録の作品中、そうした娯楽要素に対する配慮の少ない、実験的要素の強い作品であると言え、高橋自身が「当時の文学賞」受賞の噂があったと言及する前掲作「太古の血」と比較しても、本作はより「文芸志向」の強い作品であることが指摘できる。

本作がこうした特異性を持つに至った理由の第一には、先述したように掲載誌が『オール讀物』や『新青年』とい

った娯楽、探偵小説誌ではなく文芸同人誌であったことが挙げられよう。高橋は『文学建設』創刊時よりこの同人に参加していたことが確認でき、本作以外にも『蜘蛛のために』（昭和十四年四月号）、『大下宇陀児の分析』（同年五月号）、『消費文学』立候補（同年八月号）、『ケケケ』小説論（同年九月号）、『文學精神病院』（同年十一月号）、『名作撫斬座談會』（昭和十五年二月号）をそれぞれ執筆しているが、これらはすべてエッセイもしくは文学論的内容であり、同誌に掲載された小説作品は本作のみとなっている。昭和十二年から昭和十四年ころまで、高橋は本書収録の各作品をはじめさまざまな雑誌に複数の小説作品を執筆しており、また自身が所属する東京精神分析学研究所の会合、またその機関誌『精神分析』においても盛んに自作の披露や言及を行っている。この時期はいわば高橋がもつ小説執筆を盛んに行つた時期にあたり、自身のフィールドである「精神分析」を取り入れた新たなジャンルの作品創作を志向する^{〔※14〕}など、小説執筆に意欲的に取り組んでいた様子がうかがえる。この『文学建設』同人への参加もその一端であると思われるが、『文学建設』昭和十五年の半ばころ、高橋はこの同人を除名^{〔※15〕}され、それに合わせるように小説執筆の数も極端に少なくなっている。この活動転換については第三節で触れるが、いずれにせよ本作は『世界神秘郷』の後書きに顕われているような小説執筆意欲を失わせる事件が起きる以前、もしくは他の分野へ活動の比重を映す以前に書かれた、高橋の「文芸志向」活動の一端であり、本書収録作の中でも異質な作品であると言ふことができる。

● 「野獣園秘事」

【あらすじ】 フランスのルイ王朝末期、王侯貴族たちは奢汰絢爛の生活におぼれ、頹廢的な仮装と見世物が繰り出される饗宴にふける毎日をおくっていた。そんな中、王に仕える正体不明の東洋人・平山栄^{（ビシヤンロウ）}は、その幅広いな知識と

珍奇な品物を作りあげる技術で宮廷中の注目を集める存在だった。ある時、平山栄は王の寵妾セレスチーナとの語ら
いの中で、中国の「莊子」を引きながら宮廷現下の虚飾を風刺して彼女を感心させるが、その内容ががめられ王制
打倒を企む危険人物とみなされてしまう。しかし機転によってその危機を脱し、さらに王宮の「鹿苑^{ル・パルク}」で開催さ
れる外交パーティーの席での余興を考案するよう依頼される。そして当日、平山栄が居並ぶ貴族の前で披露したのは、
豪華絢爛な東洋の唐舟の上で、何百体もの精巧な人形が舞い踊り、楽曲を奏でるからくり仕掛けであった。その美し
さ、趣向の面白さに列席者はみな酔い痴れるが、からくり仕掛けは突如大音響をたてて粉々に飛び散ってしまう。歓
楽が一瞬にして文字通りの煙と消えたその光景を見て、貴族たちは驚き、かつ不吉な予感を覚え悄然とする。そして
平山栄はその騒ぎの中、いつの間にか姿を消したのだった。

本作は「筆者」（＝高橋鐵）が、在仏の友人から届けられたという一巻の巻物写本「マダム・パテ回想録^{ヌイヴエルク}」の内容
をもとに空想した話という体裁で語り出される。主人公・平山栄は、冒頭の作者による「はしがき」の中で「一人の
奇妙な支那人」として紹介されているが、同時に「ところが、その男の行状を考へてみると、どうも壮快な日本人の
やうに思われてならなかつた」という解釈が加えられ、筆者が長崎の史書中に発見した「長崎譯官のところへ出入り
してゐた平山某と稱する蘭學生が、密航してしまつたらしい」という情報（無論、フィクションである）と組み合わ
されることよつて本作の多くに共通する「海外で活躍する日本人」というフォーマットとの接続が図られている。
しかしながら、本作の物語は退廃したフランス宮廷の描写にはじまり、次いで平山栄と貴族（特に王の寵妾であるセ
レスチーナ）との対話、そして最後の平山栄による「余興」の場面へと直線的かつ平坦に展開されており、本書の他
の掲載作がなんらかの事件に主人公が巻き込まれていく過程を描いている点と比較すると、（作者による）空想昔話

りである点を考慮しても）展開は非常に平坦なものであると言えよう。主人公・平山栄の人物描写についても、先述の「実は日本人」という特異な設定、また飛び抜けた知識と技術を持ち、危機に動じない性格を持つといった描写こそあるが、それらの要素をもって彼が具体的に行動・活躍する場面はほとんど描かれない。クライマックスとなる野獣園での騒動においても平山自身は登場せず、その黒幕であり滅び行く王朝を暗示している旨が語られるのみである。また、作中で王妃セレスチーナとの会話が聞きとがめられ反体制人物として警備官に検挙される危機の場面も、平山がその機転と飄々とした物腰で即座に解決し、次の展開へとつなげる布石としてしか描かれておらず、全体的に淡々とした展開の話となっている。

なお、高橋の小説作品における「反権力」志向については、本書収録作『太古の血』の弾圧事件（後述）が取り上げられることが多いが、本作も「フランス宮廷の退廃」、「真理」を語る主人公への弾圧」等、作中の場面に仮託した形で当時の日本の状況を揶揄しようとした形跡が認められるように思う（きわめて露骨で、それが風刺として成功しているとは言い難いが）。その点において、本作は高橋の反権力性、あるいは社会観が比較的ストレートに物語反映されており、全体の構成や内容も冒頭で述べたとおり「小説」よりも（フィクションではあるものの）「昔語りエッセイ」に近い作品になっているように思われる。であればこそ、主人公・平山栄の「鶴のやうにヌーツとして、又、蠟燭のやうに長い透つた顔」（二五五頁）容姿や社会に対するシニカルな態度に、作者である高橋鐵自身の姿で透けて見えるのではないだろうか。

●メディア媛の觸手

【あらすじ】美学研究者の榎田雅彦は、皮膚感覚を科学的に探求する「タクトイリスム觸覚藝術」研究のためパリにやってきた。そ

ここで彼は都の貴顕紳士をことごとく虜にしているという高名なマッサージ師マダム・アドリアーナと出会う。以前どこかで出会ったような不思議な感覚を覚えながらも、実際に彼女の施術を体験した樺田はたちまち陶醉と快感の世界に誘われ、評判が偽りではないことを知る。その技術はもとより、アドリアーナ本人にも強い興味を覚えた樺田だったが、なぜか彼女は「もう二度と私のところへ来てはいけない」と言う。その理由を聞いただと、アドリアーナは自身がある心の病を抱えていること、また九年前すでにイタリアのボンベイ博物館で樺田と出会っていたことを明かした上で、自分はもうすぐパリから姿を消すと告げて去っていくのだった。アドリアーナの不審な態度、そして抱えている「病」の真相を探ろうとする樺田は、彼女のもとに通いその心を開いて行こうとする。しかしアドリアーナは樺田への恋慕心を告白しながらも、自身の「罪業」と「病」とに深くおびえ続け、もう施術は行わないと語る。その翌日、一人外出するアドリアーナを追ってモンマルトルの墓地に差し掛かった樺田は、そこで喪服を着た男と口論する彼女を発見する。樺田が急いで駆けつけると男は立ち去り、アドリアーナは「もう間もなく、すべてを聴いてもらう時がくる」と語るのだった。ところが翌日、アドリアーナは突然パリから姿を消してしまう。動揺する樺田のもとに彼女からの手紙が届けられ、二人はドーヴァーの海岸で落ち合うこととなった。そしてアドリアーナは夜の海に浮かべたヨットの上で、告白を始める。自分と母とを棄てた上、訪ねていった自分に冷淡な態度をとり続けた父への怨念から世の男への復讐を誓ったこと、そのための手段として、マッサージの際にモルヒネを調合した秘薬「ヘッセンザルベ魔女の膏薬」を男の体に塗り込め、その快樂の虜として心身ともに破滅させようとしていたこと、モンマルトルの墓地に居た喪服の男は、モルヒネの密売人であったこと。しかし自分の前に現れた樺田に心を奪われたことで復讐心は挫折し、一人の女に戻ってしまったこと。全てを語り終え、別れを告げるアドリアーナに、樺田は自分の想いは変わらないこと、いつまでもあなたを待っていると告げる。そしてその日のうちにアドリアーナは国外へと旅立ち、樺

田の前から姿を消すのだった。

昭和十五年版中では、本作のみ雑誌初出不明。書き下ろし作と推測されるが、現時点で未詳である。今後の調査課題としたい。本作は他の収録作と趣が異なり、西欧、しかもパリという「文明圏」が舞台となっている。またヒロインのアドリアーナも「孤島の瞳人」・「明笛魔曲」のような弱く無力な女性（少女）としてではなく、不思議な能力を使って男を籠絡し、破滅させる「魔女」としての側面が描かれている点が特徴となっている（アドリアーナの「魔女」としての側面は、作中でもギリシア神話のメデシア女神になぞらえて語られている）。同時に、主人公を「理知的な日本人」とする設定や、「男によって過去の罪、あるいは現在の陥っているネガティブな状況から救われる女」という物語構造を持つ点は他の作品と同様であり、その点において物語の展開や全体的な読後感として他作品と本質的に異なるものではない。ただし、本作においては「タクトイリズム 觸覚藝術」やそのトリックである「ヘクセンザルベ 魔女の膏藥」の謎など、物語のカギとなる謎の殆どが主人公の能動的な行動によってではなく、ヒロインによる、一方的な告白によって解決されるものとなっており、その点で娯楽性、また物語構成上の面白みといったものは一段劣ったものとなっていることも否定できないであろう（同様の指摘は、前掲作「野獣園秘事」にも指摘できるように思われる）。

● 「嗜眠舞」

【あらすじ】 劇団バルナス座の新演目『沈鐘』が幕を開ける舞台。観客たちの注目はヒロインのラウデンデラインを演じる久見寺ルミに注がれていた。これまでまったく喋らず、声を発しないという謎めいた女優だった彼女が、はじめて歌と台詞のある役に挑むということで注目を集めていたのだ。劇の進行とともに、彼女のこの世のものとは思え

ない、透き通るような歌声が見る者を驚かせ、陶醉させていく。そして客席からその様子をじっと見つめる一人の老人。彼こそはバルナス座の演出家・平野隼人に久見寺ルミを主演女優にすることを持ちかけた人物であり、同時に重い吃音障害を抱えていた彼女を素晴らしい歌い手へと変えた恩人でもある日本遺伝学の重鎮・西江博士であった。彼は戦時中、深川の空襲跡で偶然ルミと出会いその言動を観察するうちに、彼女が実は本来左利きであったが、無理に右利きへと矯正されたことが原因となって脳の言語中枢発達が阻害され、吃音障害となったことを見抜く。そしてルミに催眠術をつかった治療を施し、本来の身体能力と声とを取り戻させたのだった。博士が公演中常と同じ客席で観劇していたのも、自分の姿を舞台上のルミに見せておくことで精神的な落ち着きと自信とを与えるためだった。ところが、公演十三日目に博士は突如体調を崩し倒れてしまう。病床に駆けつけた平野に博士は遺書を手渡すと、久見寺ルミは自分の実の孫だと明かしてそのまま危篤に陥り、翌朝帰らぬ人となった。

死後に西江夫人とともに遺書を検めた平野は、そこに記された博士の過去を知り衝撃を受ける。医学生時代、博士は研究上の試みとして、書生をしていた家の小間使いの女性に「右手が利かなくなり、以後は左利きになる」という催眠暗示を掛け成功するものの、それを解くことが不可能になってしまう。博士の罪悪感はやがて女性に対する恋愛感情へと変わり、二人は関係を持つこととなった。しかし、事情を知った周囲の手により二人は引き離され、博士はその女性、そしてその間にもうけた子どもとも生き別れになってしまった。しかし焼け跡で出会ったルミがその女性と自分の孫であることを知った博士は、以後ルミの吃音障害を治療し女優として大成させることを自身の贖罪、そして生き甲斐としたのだった。平野はその遺書を手に、この祖父の言葉をルミにも伝えること、そして人生をかけて彼女を護り続けることを誓う。

本作は本書概要でも触れたように、『世界神秘郷』昭和二十八年版で新たに追加された一篇である。初出は現時点で不明。本文中の「あの戦時中」（二百八十頁）という表現や、博士とルミとの邂逅の場として設定された空襲跡の描写など、時期は明らかに第二次大戦後のものとなっているため本書書き下ろし作と推測されるが、現時点で未詳。今後の調査課題としたい。作品内容は自身の過ちからかつて愛した女性を不幸に陥れてしまった老医学者の西江が、贖罪としてその孫娘（＝自身の孫）である久見寺ルミを女優として大成させることを願い、それが果たされるまでを描いたもの。「果たされない恋愛」を物語軸にし、さらに「男性によって救われる女性」をモチーフにする点などは昭和十六年版の諸作品と同様の、高橋得意の作品構造をもっていると言えるが、本作では最終的に報いられ、恋愛や身体能力（声）、そして家族関係の「再生」が果たされる点が他作品と大きく異なる。また作中劇『沈鐘』は、ルミの晴れ舞台であると同時に西江博士自身の生涯を暗示するものとして描かれているが、筋の展開や人物の台詞が駆け足的であり、設定説明を中心とした描写に終始しているため、作品中でその描写が占める割合にくらべて、内容に緻密に関連づけられているとはいえない。しかしながら、主人公である西江博士が『孤島の瞳人』の説田や『氷人創生記』における北本のように社会から排斥される人物として終わらない点、またキーマンである平野隼人が最終的にヒロインであるルミと結ばれることを案じさせる終わり方など、明確な「ハッピーエンド」の作品となっており、その点は戦前に執筆された他の収録作との大きな違いとなっている。

3. 高橋鐵と「世界神秘郷」

「太古の血」一件について

本稿冒頭の「はじめに」で述べたように、「小説家としての高橋鐵」の知名度は、性科学者としてのそれと比べ決

して高いものではない。小説執筆を開始した当初は同じ東京精神分析学研究所の同輩をはじめ、文壇・研究関係者から一定の注目を集めていたようであるが、戦前においては、昭和十五年を境に商業誌での小説発表を止めてしまっている。また、戦後小説集として刊行されたものも昭和二十八年版の『世界神秘郷』が最後であり、時折伝奇・SF小説集のオムニバスや高橋個人の生涯を取り上げた書籍等で紹介されることはあっても、彼の小説作品そのものがクローズアップされたことはほとんどないと言って良いように思われる。その理由としては、第二節で紹介したように高橋の小説のほとんどが古典的な主人公・ヒロイン像を一定の話のパターンの中で動かすものであり、精神分析の用語を取り入れたり術学性を強めたりといった、新趣向^(※18)はあつたものの、同じく『オール讀物』や『新青年』で活躍した木々高太郎や蘭郁二郎、橋外男ら同時代の作家と比較して、小説そのものの完成度や評価は必ずしも抜け出たものがなかったことが挙げられるように思う。

その一方で、高橋鐵の小説作品として例外的に取り上げられることが多いのが、本書収録作の「太古の血」である。第二節でも述べたとおり、同作は「アイヌと大和朝廷の対立をモチーフとした内容」であつたことから当局の咎めを受け、当時の文学賞を受賞する寸前まで行きながら埋もれてしまった。幻の作品^(※19)であつたとして、高橋本人が昭和二十八年版の前書きで言及しているのははじめ、周囲からもそのように認知されてきた。また、そうした作品発表時の経緯が、戦後に度重なる発禁処分や表現規制をめぐる裁判を闘った彼の活動と重ね合わされ、「反骨の性科学者・高橋鐵」の原点となるエピソードとして取り上げられ続けたことも影響していると思われる。現在論者が確認している「太古の血」をめぐる筆禍事件についての高橋本人の言及でもっとも古いものは、第二節で引用した昭和二十八年版前書きに掲載されたものだが、それからさらに時代を下って、いわゆる、高橋性裁判^(※20)、上告中の昭和四十年に雑誌『現代の眼』五月号に発表した半生記「わが性探求の昭和史」（同号P.一七四～一八一）の中では、高橋は「太

古の血」一件を次のように振り返っている。

この作品（櫻庭註…「太古の血」）は、五、六千年前の東京が舞台で、アイヌ語で「静かな砦」の意味を持つム・チヤシに、大和の地から一人の青年がきて、アイヌの娘と巫女との三角関係が中心となってストーリーが展開され、最後に大和民族が押し寄せてきて抱き合う青年とアイヌ娘を突き殺す、そのとき富フチ・ヌリ士は大噴火をする——というものだった。（中略）昭和十五年は紀元二千六百年で、ナシヨナリズムを盛り上げていた時期で、大和民族が悪役でアイヌ民族を侵略するという私のストーリーが気に入らなかつたわけだ。

（同誌 一七七〜一七八頁）

ここでは「大和民族が悪役でアイヌ民族を侵略する私のストーリー」が官憲の怒りを買った点など、第二節で引用した昭和二十八年版前書きよりも具体的な「筆禍」の理由がつけられたとされ、同じ前書き中の「当時の文学賞をくれるとやらの噂」という下りについても、「昭和十五年新春号の『オール讀物』に直木賞候補の大作を書けというから、私も欲を出して、『太古の血』という野心作を書き上げた」（一七七頁）などデイテールが増しているのが分かる。さらに、取り調べの際に憲兵に銃剣を突きつけられるなどの強い恫喝と訊問を受けたショックを綴った上で、「私の小説家の夢は一拳にふきとんでしまった」（一七八頁）とこの筆禍事件が自身の創作活動に大きな影響を与えたことを語っている。しかしながら、「太古の血」のあらすじは本稿第二節で述べたように、「大和民族がアイヌ民族を侵略する」ストーリーではなく（そもそも同作において主人公のニギヒコとパイカラを刺殺するのは大和民族ではなく、同じアイヌ民族のノイポロである）、そうした要素はむしろエキゾチズムを演出するための「道具立て」のレベルに過ぎないと言える。また官憲からの弾圧についても、初出である『オール讀物』昭和十五年一月号に掲載されたもの

と、翌十六年に刊行された本書に掲載されたものとの間に改変や削除された点は見られず、果たして高橋本人が主張するような、彼の小説家としてのキャリアも文学賞受賞の動きもフイにしまうような強い圧力が実際にかかったのかどうかは、疑問の余地がある（仮にそのような圧力があつたのだとすれば、当時の検閲当局は著者を取り調べ訊問まで行つた。問題作^レに対して、その翌年に何の修正・改変も施さずに公刊することを許可する、という不思議な対応をとつたことになる）。その真偽はおくとしても、「太古の血」について言えば同作は確かに「大和民族」と「アイヌ民族」との出会い、そしてそれに伴うアイヌ民族側の混乱と破綻というデリケートな問題を取り出してはいるが、それらのテーマを描ききっているか、また高橋自身が「憤然と筆を折る」ほどの力を込めた作品であるかは判断が分かれる作品であると言える。すなわち、「太古の血」は高橋の他作品と同じく男女の悲劇的ロマンスに特有の銜学趣味を落とし込んだ、彼が得意とするジャンルの作品の一つとして読むことは可能であるが、（本人の意気込みや思い入れはともかくとして）高橋鐵の小説作品全体を俯瞰してみた場合に、その文学的価値から「代表作」と呼べる水準のものかどうかについては疑問が残るものだと言えよう。高橋の「文芸志向」が伺える作品としてならば、第二節で述べたように「天童殺し痛恨記」が挙げられるであろうし、彼の小説作品の様々な要素を併せ持った、いわば集大成的作品としては「氷人創生記」がそれに当たるのではないかと論者は考えている。

高橋鐵の「挫折」と再生

その一方で、大衆小説作家としての高橋鐵をみる上では、こうした「パターン化された小説」こそ彼の本領であつた、という指摘も可能かもしれない。各作あらずじ、また解説部分で述べたように、高橋の小説作品は、その多くが同様の基本構造をもち、主人公とヒロインとの出会いと別離を描いた「定型化された異境恋愛譚」としての側面をも

っている。この定型化は、

- ① 異郷あるいは大自然を舞台に、インテリジェンスのある主人公が活躍し、
- ② その地に住む、特異な生い立ちまたは立場を持つ女性と恋に落ち、
- ③ 最終的に、事件は解決したとしても女性との死別・離別、あるいは主人公の発狂等により関係が破綻する。

の三点にまとまるパターンとなっており、『世界神秘郷』所収の七作品のうち、『孤島の瞳人』・『明笛魔曲』・『氷人創世記』・『メディア媛の触手』四作品は明確にこのパターンである。『太古の血』も日本が舞台ではあるものの、先述したようにエキゾチズムをかき立てる舞台立て・道具立てや主人公とヒロインの造形は、明らかに他作品のパターンを踏襲したものであると言える^(※21)。

高橋は『精神分析』昭和十四年九月号に発表した「精神病者を描いた文學」の中で、自らの小説創作の意図を「神話傳説の近代化」と「精神分析的探偵小説」の構築にあつたと振り返っている(同四十〜四十一頁)。

確かに本書収録作の見られる主人公とヒロインの構図、そして多くの作品で共通する悲恋の結末は、神話的、あるいは民間伝承的モチーフを取り入れた結果であり、それを現代的な娯楽探偵小説、あるいは冒険小説と接続させている作品であるとも解釈できよう。だが同時に、彼のそうした創作姿勢がかえって作品に登場する人物群の非人間性(齋藤夜居が「観念的で操り人形のような人物ばかり」と指摘したような^(※22))や定型性、あるいはストーリーの「同工異曲」ぶりへとつながったいった可能性もまた否定しきれないように思われる。ただし、別の言い方をすれば、大衆小説作家としての高橋鐵の「強み」は、こうしたパターンにのっとった作品を毎号のように創作できる筆の早さと、

また精神分析学をはじめとする新奇なアイデアを織り込んで作品独特の味付けができる点とにあったとも言える。そうした作家としての器用さと（出版社側にとつての）重宝さ、そして知識の幅広さが買われた結果が、戦前の大衆小説文壇における高橋鐵の「活躍」の本質ではないかと論者は考えている。その一方で、高橋がそうした作家としての才能よりも「便利屋」的評価が先行する状況に必ずしも満足していなかったことは、（途中除名の憂き目に逢うとはいえ）文学同人である「文学建設」への参加と野心作「天童殺し痛恨記」の発表、また昭和十六年版の前書きにみられる「夢も神話も忘れ果て、ゐる。」という告白に顕われているように思われる。論者は、本書昭和十六年版の高橋の擱筆宣言の深層には、そうした高橋自身の挫折感があるのではないかと考えている。無論、「太古の血」の一件が「まったくの虚偽」であるとは断定し得ない。実際に「直木賞候補作」であったかどうかはともかく、前述のような理由から自身の小説執筆に限界を感じていた高橋が、モチベーションを喪失するきっかけとなったならかの「事件」があつたことは事実であると思われる。そして戦後、彼が『あるす・あまとりあ』および雑誌『あまとりあ』で再び文筆家として、また性科学者として羽ばたき始めたとき、こうした過去の経歴と事実とを現在の自分の立場にもとづいて再構成し、「気鋭の性科学者」として自らをよろおいつつ語るうちに、前述の「太古の血」とその筆禍事件とが彼自身、そして周囲の人物によって「反骨の性科学者・高橋鐵」の原点として「再解釈」されていったのではないだろうか。

しかし、論者はこの件を通じて、「挫折」した高橋の弱さではなく、むしろ戦後に自身が性科学者として名を挙げ、いく過程において、そして表現規制をめぐる裁判の中で戦前のこうしたネガティブな経験を一種の武勇伝として、また自らの活動の原点の一つとして作り替えてしまふ彼のタフさ、文筆家としてのバイタリテイの強さが強く伺われる。おそらくその一癖も二癖もあるバイタリテイが、彼を戦後、多くの毀誉褒貶と裁判闘争にも屈せず「性科学」へ

の道を邁進し、昭和の性ジャーナリズムを牽引した性科学の闘士・高橋鐵を生む原動力の一つだったのだろう。論者はその意味で、本書『世界神秘郷』を高橋最初の小説集であると同時に、彼の小説家としての紆余曲折と文筆家としての転換期に立てられた「道標石」であると考えている。今後、戦後の高橋鐵像の再考を進めていきながらこのような「戦前の高橋鐵」の仕事との接続をより丹念に分析していきたい。

【本文注】

- ※1 史実では日本の縄文時代に該当するが、同作では登場人物によって鉄器を利用する「ヤマトの民」の存在が語られるなど、明らかに弥生時代以降、ヤマト王権初期を思わせる時代設定となっている。
- ※2 小説以外の創作文芸としては、東京精神分析学研究所の機関誌『精神分析』昭和九年四月号に掲載された自由詩「春の自由聯想」が最初の作品となる。
- ※3 『あるす・あまとりあ』刊行の際は「あまとりあ社」名義
- ※4 併せて昭和十六年版にあった「夢 アトガキ」が削除されている。
- ※5 ただし、同会は政府当局の要請によって設立された、日本における一般市民の生活意識調査を行うことを目的とした団体で、高橋がここで言うような純然たる「象牙の塔」、すなわち学術研究機関ではない。
- ※6 櫻庭「雑誌『精神分析』における高橋鐵の活動」（専修国文九十一号）第四節・第五節を参照。
- ※7 昭和十四年に中外製薬企画部に入社、昭和十六年に同社退社後、トンボ鉛筆宣伝部に企画部長待遇で入社したとされる。またトンボ鉛筆宣伝部時代に、高橋が企画した広告コピー「太平洋に一線を引け！」が商工大臣賞を受賞したとされるが、これらは高橋本人もしくは彼の関係者によって採られた証言によるもので、現時点ま

で裏付けとなる一時資料を発見できていない。今後の調査課題としたい。

※8 昭和十二年の盧溝橋事件を契機に日中戦争が勃発。同年十二月に日本軍は南京を占領、また本作が掲載された昭和十三年五月には徐州作戦が開始されるなど、中国各地で各地で戦闘が継続していた。

※9 特に「孤島の瞳人」における、説田老人の真偽定かならざる武勇伝^レという構造と、本作が最終的に、発狂した北本の妄想^レとして周囲に認識されるといふ展開は、ともに「かつて冒険と栄光―富やヒロインとのロマンス―とを手にしながら、現在は社会的にドロップアウト（自身の選択か周囲の強制かの違いはあるもの）している人物」による昔語り、という大きな共通点がある。

※10 書き下ろし作と思われる「メデア媛の觸手」（後述）および「神聖植物」、「聖パウロの冥婚」（二冊目の単行本である『南方夢幻境』に収録。本稿では扱わない）をのぞく。

※11 『わが性探求の昭和史』（『現代の眼』昭和四十年五月号／現代評論社）

※12 『世界神秘郷』昭和二十八年版まえがきなど。第三節で詳述するが、後に高橋は「太古の血」を、直木賞候補作^レとして執筆したと証言している。

※13 『文学建設』昭和十五年七月号巻頭に掲載された「同人住所録」に「豊島區長崎東町二ノ七〇五」として住所掲載あり。

※14 前掲「精神病者を描いた文學」（『精神分析』昭和十四年九月号）

※15 「文学建設」昭和十五年九月号八十二頁の「會報」欄で、もう一名の同人と共に「規約第十三條に據り今回除名した」とある。以降、高橋の作品は掲載されず、同人住所録にも名前が掲載されないことから、同年七月（八月の時点で除名処分となったものと思われる。なお、次号である昭和十五年十月号六十一頁の「會報」欄に

は「前號除名報告中規約第十三條とありたるは「第十一條」の誤りに付訂正す。」と書かれているため、高橋の除名は「文学建設」同人の規約第十一條に拠ったものであることがわかる。同規約の内容については未詳。今後の調査課題としたい。

※16 東京精神分析学研究所の同輩・倉橋久雄は『精神分析』昭和十三年一・二月号掲載の「『交霊鬼懺悔』讀後感——高橋鐵氏の新しき出發を祝して」で、「怪船人魚號」および『オール讀物』昭和十二年十一月号掲載の「交霊鬼懺悔」を取り上げ、「いづれも分析學を巧みに応用してゐるのみならず讀みものとしても誌上第一の出来映えであつた事を保證する。」(九十頁)と高く評価している。

※17 高橋の作品が収録された小説集として、「怪船人魚號」を収録した『日本SF古典集成2』(横田順弥編、早川書房、昭和五十二年)、『怪奇探偵小説集3』(鮎川哲也編、角川春樹事務所、平成十年)、『人魚の血 珠玉アソロジーオリジナル&スタンダード』(井上雅彦監修、光文社、平成十三年)、「天童殺し痛恨記」を収録した『大衆文学大系29』(大佛次郎ほか監修、講談社、昭和四十八年)などがある。

※18 もっとも、本人も言及しているように精神分析学の知識を探偵小説に取り入れた同時代として木々高太郎らがあり、高橋は当時としてもその分野の嚆矢、あるいは第一人者にはなり得ていなかった。

※19 本文でも触れたとおり、高橋は「わが性探求の昭和史」で「『オール讀物』編集部側から)直木賞候補の大作を書け」という要請があったと語っているが、実際に「太古の血」は直木賞候補作とはなっていない。

※20 昭和三十八年に一審判決で敗訴しており、「わが性探求の昭和史」掲載時は東京高裁に上告中だった。

※21 劇作家の高取英は、『新文芸読本 高橋鐵』(河出書房新社・平成四年)上で発表した「小説家高橋鐵」の中で、本書収録作以外にもデビュー作である「怪船人魚號」(『オール讀物』昭和十二年十一月号)や、続く「交

「靈鬼懺悔」(同十二月号)を取り上げた上で、「悲恋としては同じメロディを奏でる」(一五六頁)と高橋の小説が持つ作風の同一性を指摘している。

※22

「私も彼の創作集を読んでみたが、観念的で操り人形のような人物ばかり登場し、精神分析学の解釈を下されているようだった。しかし、当時としては一種の新風を吹き込んだことは事実であつたらうと想像される。」

(『悩まざりし人ありや』評伝 高橋鐵―) 五十五頁(斉藤夜居、太平洋書屋、昭和五十五年)

【参考文献】

『性の伝道者 高橋鐵』(鈴木敏文、河出書房新社、平成五年十一月)

『新文芸読本 高橋鐵』(河出書房新社、平成五年十二月)

『悩まざりし人ありや』評伝 高橋鐵』(斉藤夜居、太平洋書屋、昭和五十五年八月)